

# 店蔵造町屋建築の変遷に関する研究 -埼玉県近代和風調査と日光社参史料を中心として-

建設工学専攻  
建築史研究

ME16104 山崎 僚大  
指導教員 伊藤 洋子

## 1. 研究背景・目的

明治から昭和初期に建てられた近代和風建築は、高度経済成長期以後の開発や現代住宅の普及に伴い、近年全国で急速に失われており、その実態調査と保護が喫緊の課題となっている。そのため、文化庁の指導、補助金を受け、平成4年度以降、順次全国で調査が行われてきた。平成27年度～28年度の2年間、埼玉県の近代和風建築調査に参加する機会を得て、さいたま市と比企郡に現存する近代和風建築の実測調査を行った。本研究では町屋建築に関して着目し、さらに埼玉県立文書館蔵の日光社参史料を主に用い、その成立過程を探ることを目的とする。

## 2. 研究方法

- ① 埼玉県の伝統的住宅建築の実測調査を行い、建築物の基本的な構造・意匠を知る。
- ② ①に伴い、歴史史料、絵図に描かれている平面形式の類型化をし、変遷をたどる。

## 3. 実測調査対象建築物について

以下、埼玉県による学術調査の結果を示すが学術研究にて名字を出す許可を得ている。

### 3.1. 松本家住宅

建築年代は明治元～3年で、与野の本町通りの西側に建つ土蔵造2階建の町屋である。店蔵部分が通りに面し、奥に主屋が続く。当時は肥料販売商を営んでおり、現在は塩や砂糖などの販売を営んでいる。

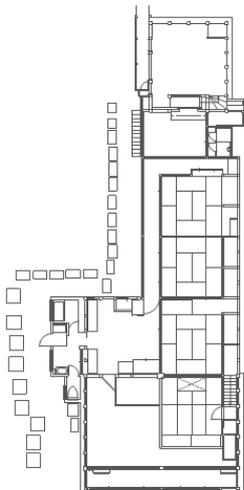


図1 松本家平面図



写真1 松本家外観



写真2 松本家内観

### 3.2. 武川家住宅

建築年代は明治24～25年で土蔵二階建ての店蔵をもつ町屋である。当時は織物仲買商を営んでおり、現在の店蔵部分は物置となっている。明治44年の家相図によると、ミセ部分は記載されておらず、店蔵を後から付加したことがわかる。



図2 武川家平面図



写真3 武川家外観



写真4 武川家旧店蔵

### 3.3. 青山茶舗

建築年代は、江戸時代末期～明治初期で、中山道浦和宿の南側に建つ店蔵造の町屋である。江戸時代末期～明治元年に建てられ、店蔵は、浦和宿の町屋建築の特徴で出桁造である。店蔵の奥に主屋が続き、その奥には当時茶の保管に使われていた蔵が現在でも残っている。

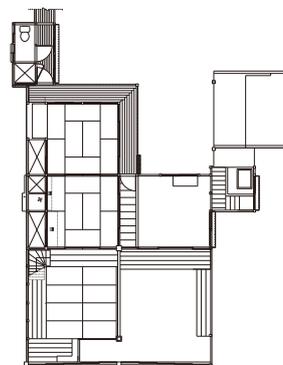


図3 青山茶舗平面図



写真5 青山茶舗外観



写真6 楽風（保管蔵）

#### 4. 古絵図, 日光社参史料からみる平面形式の変遷

##### 4.1 日光社参とは

江戸時代、徳川将軍家が家康の命日（旧暦4月17日、新暦6月1日）に合わせて、家康が東照大権現として祀られている日光東照宮と三代将軍家光が祀られている大猷院へ参拝することを「日光社参」と呼んでいた。

##### 4.2 会田家文書

会田家は、浦和市大門の旧家で、代々日光御成道大門宿の本陣を勤めたほか、周辺が紀伊徳川家の鷹場であったことなどから、紀州鷹場の鳥見役にも任命された。会田家文書は8200点を超える膨大なもので、村方史料、宿駅史料、鳥見史料に大別できる。会田家文書の大部分は、浦和市文化財に指定され、ほかに会田家の表門(1694年)が「大門宿本陣表門」として県指定文化財に指定されている。その中で、天保14年日光社参の際の大門宿の居宅を宿所としてあてるために調査した住居絵図により、当時の平面形式がどのようなものであったかを明らかにする。表口が御成道に面して建てられており、表口を中心に土間、座敷、馬屋、火たき場、湯所、雪隠、床間、仏間、押入のほかに長屋門などが描かれている。大門宿東側籠絵図には31軒、大門宿東西入屋籠絵図には32軒、大門宿西側籠絵図には32軒の住居絵図が描かれている。

大門宿は、農家が多い宿場町であるが、その中で脇土間+一列三室型（二列型）のものが絵図に描かれている計95軒のうち12軒でみられる。

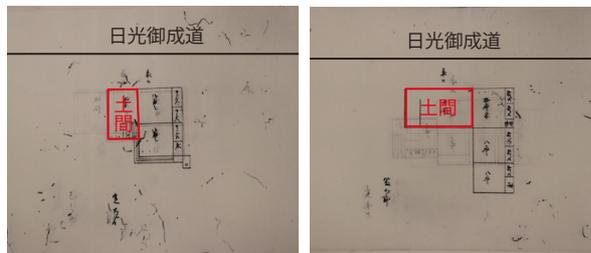


図4 脇土間+一列三室型（二列型）の平面

##### 4.3 与野町絵図

文政7年(1824)に描かれたと推定される「与野町絵図」には多くの草葺の住宅と、一軒の瓦葺蔵造の住宅が描かれている。与野は度重なる大火の記載があり、早い段階で蔵造の町屋が普及していったと考えられる。実測対象の松本家、武川家はこの絵図以降に建設された。



図5 与野町絵図

#### 5. 住居平面の変遷

先行研究によると、関東から南東北地方の町屋にみられる主屋の全面に棟を違えて店棟を接続させる形式は、市場としての機能が衰退し、次第に店が常設化していった結果と推測されている。町屋の主屋部分の原型が会田家文書にも描かれていた、図4の脇土間+二列または三列の平面形式だと考えられる。

次第に常設店舗の必要性が増し、3.2の武川家のように、後から店蔵部分を付加する形(①)がみられ、②のような形の店部分と主屋が一体となった、現在でも多く残る町屋建築の形が定型化していったと考えられる。

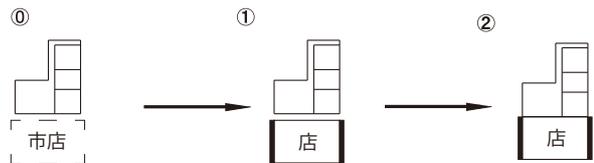


図6 店蔵造町屋の変遷

#### 6. まとめ

本研究では、実測調査に加え、江戸時代末期に残る住居絵図の分析を行うことで、現在に残る町屋建築の発展過程が明らかになったと考える。会田家文書により、江戸時代末期の平面形式がどのようなものであったか理解でき、街道に残る店蔵町屋建築の変遷を追うことができた。また、今回調査した建築物は、店蔵造の町屋建築の変化の過程を見られるもので大変貴重な建築物であると考えられる。

#### 参考文献

- 『蔵造り住宅の系譜・蔵造り住宅の詳細調査』  
与野市教育委員会 2000年
- 『岩槻市史 文化財編』 1985年
- 『浦和市史 近世資料編』 1984年
- 『町家の建築史論』 大場修 2004年
- 「関東の定期市再考」 中島義一 2001年  
駒沢地理 No.37 p1-p16 2001年
- 「宿場の街道と町家の間にみられる帯状の空間について」  
宗方保博 波多野純  
日本建築学会関東支部研究報告集II p309-p312 2007年
- 「東日本における市町の構成と常設店舗の成立過程  
—近世町家の地方形式に関する史的的研究—」 大場修 石川  
祐一 住宅総合研究財団研究 年報No.24 1997
- 会田家1915「御成道家並籠絵図 西側佐左衛門より利右衛  
門迄」 埼玉県立文書館 所蔵
- 会田家1916「御成道より東西入屋之分籠絵図」  
埼玉県立文書館 所蔵
- 会田家1917「御成道家並籠絵図 東側六平より常八迄」  
埼玉県立文書館 所蔵